

第22回国富町読書感想文コンクール

最優秀賞 受賞者

学年	学校	氏名	作品名
小学校1年	森永小学校	黒木 愛	ゆうたくんへ
小学校2年	木脇小学校	長友 柑奈	音が聞こえたらいいのにな
小学校3年	木脇小学校	井戸川 嵐	せんそうと命
小学校4年	本庄小学校	堀田 蓮音	「小さなけいさつ犬くう」を読んで
小学校5年	本庄小学校	武田ひなた	「捨て犬・未来と子犬のマーチ」を読んで
小学校6年	八代小学校	福嶋 和	友達のために、みんなのために
中学校1年	木脇中学校	後藤 眞尋	夏の朝を読んで
中学校2年	木脇中学校	黒木 利咲	「さかさ町」を読んで私は変わった
中学校3年	木脇中学校	齋藤 薫	「生きる」を読んで



ゆうたくんへ

森なが小学校 一年 くら木 あい

ゆうたくんは、「きもちつうちょう」を見て、とてもびっくりしたんだね。わたしも、「いじわる」や「ふしんせつ」や「じぶんかって」のコインがたまるとびつくりしたよ。

ゆうたくんがすることを、ぼんとうさんがどこかで見ていたんだね。りくくんのあたまをたいたいなり、ここみちゃんの本をけつたりしたから、くらコインがどんどんたまってしまったんだよね。

ゆうたくんは、本とうに、ふたりのことがきらいだったの。わたしは、ゆうたくんは、やさしい人だとおもったよ。だって本とうは、ここみちゃんの本をひろってあげようとおもっていたんだよね。おもっていたけどできなかっただけだよ。

わたしも、こんなことがあったよ。ひとりぼっちのおともだちに、「いっしょにあそぼう。」ってこえをかけたかったけど、はずかしくていえなかったんだよ。ゆうたくんのおはなしをよんで、わたしの「きもちつうちょう」にも、くらコインがたまったかもしれないな、とおもったよ。

だから、わたしはひとりぼっちのおと

もだちがいたら、ゆうきを出して、「いっしょにあそぼう。」ってこえをかけるよ。くらコインがたまると、じぶんのころがからっぽにならないようにね。

でも、「チャレンジ」や「ゆうき」や「どりよく」のころで、ぎんいろコインがたまるとだよね。ぎんいろコインがたまればたまると、じぶんのころは、ますます大きくなっていくんだよね。

ゆうたくん、いっしょにぎんいろコインをたくさんためていこうね。

音が聞こえたらいいのにな

木脇小学校 二年 長友 柑奈

わたしのころにのこったのは、さいしょにゆうたくんがりくんにいじわるをしたときに、ジャリーンという音が聞こえたところです。

さいしょは、なんの音かわからなかったけれど、読んでいくうちにころコインがたまる音だとわかりました。ころコインとぎんコインは、音がちがいます。ころコインが百こあつまると、じぶんのやさしさがからっぽになります。それをばんとうさんから聞いたゆうたくんは、じぶんからすすんでやさしいことをしました。それで、ぎんコインがいっぱいあつまりました。

ゆうたくんにコインがたまる音が聞こえるようになったのは、やさしさがなくなるまえに、気づいてほしかったからかなと思います。

わたしの気もちつうちょうには、ころコインとぎんコインどっちが多いかなあと思います。ぎんコインがたくさんあつまっているとうれしいです。でも、もしかしたらころコインがいっぱいあつまっているかもしれない。どうしてかという、おとうとにいっぱいいいじわるをしてしまうからです。わたしにも、コイン

がたまる音が聞こえたらいいなあと思います。ころコインとぎんコインのどっちがたまったかすぐわかるからです。

これからはわたしにもゆうたくんのように、ともだちやおとうとにもっともつとやさしくしたいです。そして、できるかぎりなまけものになったりよわむしになったり、いじわるになったりするのをがまんしたいです。

やさしさのほかにもチャレンジャーゆうきのぎんコインをふやして、前のじぶんより、もっといいじぶんになりたいです。コインの音をそうぞうしながらがんばります。

せんそうと命

木脇小学校 三年 井戸川 嵐

ぼくは、「かわいそうなぞう」を読みました。このお話を読んで命を大切にしないといけないと知りました。せんそうで命をなくした人や動物がたくさんいることも知りました。このお話は、せんそう中の動物園の中で本当にあつたお話です。ぼくだんでおりがこわれたら、動物がにげて、町であばれるかもしれないから、動物園のしいく員さんがえさを与えずにぞうをころしたお話です。

ぼくがこのお話の中で一番心にのこった場面は、しいく員さんがぼくだんを乗せたひこうきに「せんそうをやめてくれ！」と言った場面です。しいく員さんたちは、せんそうをやめてくれればまた動物たちと一しょにすごせると思っていると思うからです。

あと一つ心にのこった場面があります。それは、やせっぽちちになつて、たおれそうな二ひきのぞうが、力をふりしぼつて、げいとうをする場面です。げいとうをすれば、えさがもらえると思っていて、一生けんめいがんばっている所を見て、ぼくはつらくなりました。ぞうは、言葉がしゃべれないけど、がんばったごほうびがもらえることを知っていたと

思います。しいく員さんもぞうの気もちが分かるから、そのすがたを見てしくしくないでいたと思います。ぼくは、えさをあげればいいのにと思いました。

国語で習った「ちいちゃんのかげおくり」のちいちゃんも、ワンリーやトンキーも、死にたくなかったと思います。ちいちゃんは、早くせんそうが終わつて、家族と一しょにすごしたい。ぞうたちは、またみんなの前でげいとうをして、おなかいっぱいえさを食べたかっと思えます。でもそのねがいもせんそうにうばわれてしまいました。せんそうは、いろいろなものをうばうことも分かりました。

今せんそうがあつたら、楽しい時間がこわい時間になつたかもしれない。一番大切にしなれない命がせんそうでたくさんうばわれました。

だからぼくは、せんそうがつづいていなくてよかつたと思います。せんそうは、悪くない人も言葉がしゃべれない動物もころします。だから二度と起きてほしくないです。これからもぼくは、何があつても自分の命は自分で守つて、ちいちゃんやぞうたちのねがいをかなえていきたいです。平和なくらしそのまま、大人になるまでずっと幸せにすごしていきたいです。

「小さなけいさつ犬くう」を読んで

本庄小学校 四年 堀田 蓮音

この本を読んで犬もいろいろな訓練をすれば、むやみにほえることもないことに感じました。ぼくのおじいちゃんの家ミニチュアダックスのムーミンという犬がいます。おじいちゃん行く所には、どこにでもついて行き、おじいちゃん言う事も分かっているようです。顔を見ているすがたはとてもかわいくて、家族みんなをいやしてくれます。

ムーミンもくうといっしょでバイクの音にとでもびんかんでよくほえます。くうは、訓練所で、めきめきと力をつけ、犬のきょうぎ会でゆう勝し、けいさつ犬の試験にも合かくしました。くうはとても努力したんだなと思いました。でも訓練所から家に帰ると、ムーミンと同じで、家族の顔を見てしつぽをふりながらころんとひっくりかえってあまえる動作は、とてもかわいいと思いました。くうは、ミニチュアシヌウザーという種類の小さな犬で、けいさつ犬には、めずらしい犬だそうです。でもくうは、大きな犬にも負けないぐらい、訓練をがんばったので、とてもえらいなと思いました。

ぼくも今くうと同じようにがんばっていることがあります。それはサッカーです。始めのころは、体力がなくて長いきよりを全力で走ることができませんで

した。周りのみんなを見てくやしい気持ちになり、もつと本気で練習しようと思ふるようにしました。そしたら、長い時間走れるようになって、試合でも体力を切らさずにプレーすることができるようになりました。ゴールも決められるようになった。

このくうの本を読んだことで、ぼくは、はたらく犬たちがたくさんいる事を知りました。日本でもいろんな災害が起こり、さいきんでは、くま本をしんげんとする大きな災害がありました。災害や事故で行方不明になった人をさがす犬の事を、災害きゅう助犬というそうです。調べてみると、災害きゅう助犬は、ふだんは起こらない災害を想定して色々な訓練をしていることが分かりました。その中でも、実さいにくずれたビルなどでそうさく訓練をしているのがすごいなと思いました。そのわけは、がれきの中で自分の鼻をたよりにさがしているからです。ぼくだったら、心細くなつてこわくなると思います。それに足場の悪いきけんな場所なので、自分の命があぶなくなることもあるかもしれせん。それでも勇気を出して人を助けに行くのはすごいです。ぼくも人の役に立つ仕事につきたいと思ふようになりました。そのためにこまっている人や友達にやさしくしたいです。また、自分がなりたい仕事を早く決めるために、色々な事にちようせんして学校のべん強もがんばりたいと思います。

「捨て犬・未来と子犬のマーチ」

を読んで

本庄小学校 五年 武田 ひなた

図書館で本を選んでいた時、せ表紙にうちのペットと同じコーギー犬がのっている本を見つけました。コーギー犬の物語なのかなと思ひ、借りてみることにしました。

未来が保健所に保護された時、人間に目をつぶされたり後足を切られたりしていました。だから、子犬の未来は三本足です。何もつみのない犬が、どうしてそんなことをされないとはいけないのだろうと、わたしは悲しくて、とても腹が立つてしまいました。人間より、はるかに短い一生でがんばって生きているのに。

未来はそれから、里親をさがしてくれる人のもとに引き取られます。ホームページで里親をば集すると、母ちゃんが未来を見つけてくれたのです。里親の母ちゃんは、未来を引きとつた後、きずをおつた利休や夢ちゃん、ルイちゃんなど、たくさん他の犬も引き取りました。その犬たちに、未来は、トイレの場所やベットをかんではいけないことを教えました。そのすがたを見て、犬達があいがいに助け合っている感じがしました。

未来は、保健所から里親の母ちゃんに引き取られたのでその後しあわせにくらすことが出来ました。けれど、保健所に

いる犬は一定期間あずかり、引き取り手がない場合、殺しよ分されます。人間はその事実を知らないのかもしれない。もし、わたしが飼つている犬が保健所に連れて行かれて殺しよ分されるとしたら・・・想像したくないし、考えるととてもこわいです。犬は人間より短い一生なのになぜきつづけるのか理解できません。

これから、どんな犬たち、そして動物たちにもしあわせにくらししてほしいです。そのために人間は、動物を飼う時に、自分が最後までちゃんとめんどうをみることができるか、しんちように考えるべきと思ひます。

未来やゆめちゃんのように飼い主にいじめられたり、無理やり子どもを産ませる捨てられる犬がいます。ペットをいじめたりぎやくしたいすると、ペットは不幸になります。ペットには幸せになつてほしいです。だから、飼い主は、ペットの命を大切に、ペットの気持ちも考えながら面どうを見てほしいです。

友達のために、みんなのために

八代小学校 六年 福嶋 和

「モモってどういう意味なんだろう。」

それが、私がこの本を手にとった理由でした。私が手に取った本の題名は「モモ」という名前でした。さいしよに表紙を見た時は、意味が分からなかったけど、読んでいく内に、だんだん意味が分かかっておもしろくなってきました。このお話は、とつ然町のはずれの円形劇場に迷い込んだ少女モモが、ある日、急に人が変わってしまった友達や人々を助けようとその原因を作った「時間どろぼう」を相手にがんばって立ち向かうというお話です。読み終わって私は、「友達やみんなのために一人で大勢の大人に立ち向かっていくなんて」と、とてもびつくりしました。それに時間どろぼうはふつうの大人とはちがいで、手ごわく、冷たい人達です。そんな相手にがんばるモモの姿にドキドキしました。もし私がモモだったら、大勢の大人に立ち向かうのは無理だったと思います。理由は、やっぱりこわいと思うからです。大人一人でもこわいののに、大勢となるととてもこわいし、たとえ友達やみんなを助けないといけない時でもあきらめてしまうと思います。でも、モモは友達やみんなを助けようと一生けん命がんばっていました。そうしたら、ずつとこわがっていた自分が小さく感じてし

まいりました。

モモの姿におどろき、感心した中で心に残っている場面があります。それはモ

モをじやましに来た一人の時間どろぼうが本音をしゃべってしまふ場面です。私はこの場面を読んで、「敵であるモモに、どうして話したんだろう」と不思議に思いました。でも私は、その時間どろぼうはとても必死で、だれかに話を聞いてほしかったという気持ちがあつたんじゃないのかなと思いました。だれだつて必死でやっている事には話を聞いてほしくありません。それが敵であつても、味方であつても同じことです。時間どろぼうでも心は持っています。だから、やっぱり私達と同じなんだと思いました。

この本を読んで私は、「時間は大切にしないといけない」ということと、「大切な人のためには一人でも立ち向かう」という二つのことを学びました。時間は、一人一人同じ時間しか持っていません。でも大事なところは、その時間をどう使うのかが大事なことだと思えます。学んだことのひとつである「時間を大切に」は、このことだと思えます。

私は今まで一日という時間を、何も考えずに過ごしていました。でもこの本を読んで、もっと時間を大切に使うと思いました。まずは、時間の使い方を見直すことから始めようと思います。そしてこれからは、時間を有効的に使いたいです。

夏の朝を読んで

木脇中学校 一年 後藤 眞尋

「はすの花には「想い」が詰まっています、開花の時、ぼん、という音とともに空に放たれる。」これは、主人公の莉子の親せき、小夜子おばちゃんの言葉だ。この言葉をきっかけに莉子は亡き祖父の過去へ行くことになる。

祖父の家の庭には、はすの花いっぱいのはす池がある。莉子は、「ぼん、」という音が聞きたくはすの花の開花を待った。でも音はなく、開花とともに祖父の過去へ行ってしまった。私はこのとき、祖父の「想い」を莉子が受け取ったから過去へ行けたのではないかと思った。そして、莉子も「おじいちゃんに会いたい」という想いがあつたのだと思う。

はすの花の開花で過去に行くたびに、どんどん時がさかのぼっていった。そして祖父の青年時代。このとき莉子は青年に、「次に来るときは、はすの実を持って来るように。」と言われていた。なぜそんなことを言うのか、私は疑問に思った。しかし、その疑問は莉子が少年時代に行ったことではなくなった。

祖父の少年時代。そのときは、家もはす池もなかったそう。そしてはす池は山の中にあつた。が、きれいだったはず池は花もかれて無残な状態だった。ここで私は、青年の言った言葉の意味を理解

した。莉子もつてきた実は、このはす池を元の姿にもどすために使われるのだと分かったのだ。少年は莉子から実を受けとり、「そのうち花を増やして、何倍にもして返しやる。」と言った。

私は、祖父がはす池をずっと残したいと思っているだろうと考えた。その理由は、祖父が少年だったとき、かれていたはず池を今では花いっぱいにしたからだ。それだけはず池のことが好きで、莉子への感謝の気持ちが強かったことが感じられる。

私は考えた。少年が育てたはすの実は、ただのはすの実ではなく、実の形をした「感謝」の気持ちだということ。言葉で感謝を伝えることはできない。だから、はすの実を使ったのだと思った。この物語では、はす池という未来に残すことができるものができた。そして、私の家にはずっと残すことができるものがあるだろうかと考えた。でも、いまはないことがわかったが、おばあちゃんやおじいちゃんの家には、しょうがの味そづけや梅ぼしなどの受けついदैける「味」があることに気づいた。私は、梅ぼしもうがも大好きなのでこれから先も、ずつと変わらない味でいてほしいと思った。

今、私には「想い」を伝えたい人がいる。それは、四年前に亡くなったおじいちゃんだ。とても優しく、いろんなことを教えてくれたので感謝している。そ

して、時々しか遊びに行かなかったにもかかわらず、行くとかんげいしてくれてとてもうれしかった。でも、あまり話さなかつたり、厳しく言われて腹が立ったりしたことがあるのはとても後悔している。そして、おじいちゃんと今まで過ごしてきた、伝えたい想いは「感謝」だと、分かった。もしもはすの花を見る機会があつたら、おじいちゃんに届くように感謝を伝えられたら良いと思った。

私が、この物語を読み思ったことがある。それは、たった一つの実だけで、何年間もかけて感謝を伝えるということがすばらしいということだ。もし、私だつたら一つの感謝を伝えるために何年もかけられないと思うからだ。この物語で、小夜子おばちゃんが言っていた「想い」とはどういうものなのか、少しだけ分かったような気がする。「想い」とは、祖父の家に住んでいた人々の一人一人の気持ちとか、日常の思い出とかがたくさん詰まった物語なのだということ。そして、その一人の「想い」を受け取った人は、その人の気持ちを味わうことができるのかなと思った。

私はこれから自分の想いを人に伝える機会が増えると思うので、一つ一つの気持ちを大事にしていろんな人に感謝を伝えていきたい。

「さかさ町」を読んで私は変わった

木脇中学校 二年 黒木 利咲

このさかさ町という本は、私の父が買ってきた本の一冊である。私の父はこの本を読み終えて、

「なるほど。おもしろかった。」
と言った。それで私も読んでみたいと思ったのがきっかけである。

この本の登場人物は、六歳くらいの男の子、リッキーと妹のアンだ。この二人が、電車でおじいちゃんの家に向かっている途中、電車が止まり、一つ前の駅に戻った。そこが「さかさ町」だった。さ

かさ町は名前のとおり全てがさかさまだ。野球ではヒットを打つたらアウトで、三振をした人がバツとして塁に出るというルールになっている。点数が少ない方が勝利だ。この他に、私が興味をもった例がある。それは、子どもが働いていて大人が遊ぶということだ。このようなことが現実にあれがいいなと思う。なぜなら、子どもにとって、働くことはどれも新鮮で楽しいことだと思うし、大人は子どもどきに働いた分、のんびりと生活をすることが合っていると思うからだ。

そのほかにもこのようなことがある。それは歴史の授業でのことだ。普通なら、昔の時代の出来事から現代の出来事の順で学ぶけれど、さかさ町では、現代の出来事から学び、次第に昔の時代に戻って

いくという授業をしている。私はこのような授業は受けたことがないけれど、一度だけ受けてみたいと思う。

私たちの先祖はどのようにしてここに来たのか、過去に何があったのかということを考えてから、次第に時代をさかのぼるという授業もおもしろそうだなと思う。歴史は昔のことから学ぶものだと思うっていたので、考えをさかさまにしてみると物事を新鮮に捉えることができると思った。この本を読み終えて、いろいろな物事には、一つの見方や考え方があるといふことだけではなく、さまざまな見方や考え方があるといふことを知ることができた。

今、私は吹奏楽部に所属している。私が受けもっているトランペットのパートには、昨年まで三年生がいた。しかし、今年から三年生不在で、一・二年生だけのパートになった。昨年までは、三年生がいたことで、難しい音符のところや高い音のところも上手にできていて、先生からの注意を受けることが少なかった。ところが、今年からは音の間違いも多く、先生に指導されることが昨年より増えたと思う。

私の今までの考え方は、「三年生がいなくなることが理由でたくさん注意されるようになった。」と思っていた。逆に、「三年生がいればもっと上手にできるのに。」としか考えていなかった。しかし、さかさ町を読んで感じたように、考え方

を変えてみると、「三年生がいらないからこそたくさん意見を出し合ったり、間違いを注意できたりして、もつと上達できるのかな。」というふうを考えることもできる。

また、勉強面でも同じようなことがある。私は毎日、学校から出される課題や自分の勉強、習い事など、しなければならぬことがたくさんある。私は時間を有効に使ったり、きちんと計画を立てたりすることがあまり得意ではない。だから、いつも自分からではなく、父や母にいわれてから物事に取り組むことが多い。勉強や習い事など、しなければならぬことがたくさんあると、何から計画を立てたらよいのか分からなくなり、物事に取り組み始めることが遅くなる。しかし、これも考え方を試してみること、前向き捉えることができる。しなければならぬことがたくさんあると、計画を立てなければいけない分、判断力もつけられることができると思う。

この二つの例から、さかさ町のように見方や考え方を少し変えることで、欠点もチャンスに変えることができるということを知った。

これから先、学校生活や私生活、受験などでマイナスマな考え方をしてみたい、立ち止まってしまうことがあるかもしれない。そのときも、一つの見方や考え方でなく、さかさ町のようにさまざまな視点から物事を見てみようと思う。

「生きる」を読んで

木脇中学校 三年 齋藤 薫

「人として生きる」ということについて僕は何度も考えなければならなかった。

主人公の劉連仁をふくむ多くの中国人は日本に強制的に連れてこられた。彼らは空腹と寒さに耐え、時に激しい暴力を受けながら、炭鉱での辛く厳しい仕事をさせられた。

そんな状況の中でも、諦めず生きつづけた彼の心の支えとなったのは、故郷で待つ家族への思いだった。彼には愛する妻と子どもがいた。何が何でも生きて帰らなければならぬ。その気持ちがあったからこそ、労働所から命がけの脱出をしたのだ。そして、もう一つの支え、それは仲間だった。彼らにも守らなければならぬ人や、生きたい理由があった。同じ思いをもつ仲間と励まし合い、苦しみや悲しみを分かち合えたからこそ、生き続けられたと思う。

僕は、日本で行われた強制労働の事実を知り衝撃を受けた。それと同時に、人として生きるということについて深く考えた。「人として生きる」ために必要なこと。それは、「自分らしく生きる」ことではないだろうか。僕が生きていることを実感できるのは、大声で笑うくらい楽しかったり、その楽しさを仲間と共有

したりしている時である。だから劉連仁が強制労働をさせられているときや、空腹や寒さに耐えながらただじっと命をつないでいるだけの状況だけでは、人として生きていたとは決して言えないと思う。

しかし、劉連仁には、共に過ごす仲間との絆、信頼、そして希望を失わずにいられた強い心があった。そして、彼は常に人の命の尊さを感じていた。たとえ、それが味方でなくても、同じ心をもつ人間として。だからこそ彼は「人として生きる」ことができたのだ。もし自分だったらどうだろう。彼のような命の危機に陥ったとき、果たして変わらぬ心で人を受けることができのだろうか。とても自信はない。衣食住、全てにおいて何不自由ない生活を送っている今だって、切羽詰まった状況になると、周りの人の気持ちまで考える余裕を無くしそうになることがある。

強制労働で苦しんだのは、強制連行された人たちだけではない。同じころ、北海道の炭鉱で命を落とした日本人もたくさんいたことを、先日ニュース番組で知った。番組の中では、中国から来た学生がこの事実を驚き、ショックを受ける様子も映し出されていた。僕と同じだった。この歴史的な事実を知ったうえで、私たちにできることは何だろうか。それは起こった事実をしっかりと受け止め、その背景にどんな問題があったかを

考えるということだと思ふ。

では、背景にあつた一番大きな問題とは何だろう。それは人間の尊敬が守られてなかつたということだ。自分の意に反し、自由に生きる場所を奪われる。家族や友人と引き離される。睡眠や食事など生きるために必要なことまで奪われる。いつの時代であつても決して許されることではない。僕は、長崎や広島、そして沖繩で訪れた資料館で、戦争の悲惨さを目の当たりにし、恐ろしく感じた。しかし、今回、人が人の尊敬を当然のように奪い合うことこそ恐ろしいのだと感じた。

今、日本や世界中で起きている事件などはどうだろう。今の恵まれた状況の中でも、自分の利益だけを考へて反抗する人、人の気持ちなんて一切考へず、勝手な言い分でたくさん尊い命を奪つた人もいる。尊厳を奪う行為というのは、事件になることばかりではない。筆者は「非正規雇用」や「格差社会」についても書いていた。僕は考へた。周りに軽い気持ちで友達を無視したり、自分に都合がいいように仲間外しをしたりする人はいないだろうか。そういうことも、尊厳を傷つける行為ではないだろうか。「人は、唯一無二の存在であるからこそ、自分らしく生きなければいけない存在なのです。だからこそ時に苦しむ。それは一人一人の心が『自分らしく生きたい』とさけぶからなのです。自分として生き

る。そのためにこそ生きぬく。」

この本に書かれた文章である。自分らしく生きるためには互いに認め合い、尊重し合うことが大切だ。ニュース番組の中の中国の学生は、北海道の地で共に学んだ日本人学生との交流という新たな一歩を踏み出した。

僕には今、たくさんの方がいる。それぞれの個性や気持ちを大切に付き合っているし、彼らも僕を大切にしてくれている。互いのことを認め合えば、小さないざこざも起らないし、とても仲良くしていける。これも、平和への道なのではないだろうか。

人との出会いは、その人の生き方との出会いだ。自分とは違つた習慣、個性、考へ方があつて面白い。僕はこれからも、たくさんの人との出会いを大切にしたい。それこそが僕にとって「自分らしく生きる」ことだから。